

2019年度理系チャレンジ講座（第3回）を実施しました

7月17日（水）に理工学部の柴田建先生を講師に迎え、「21世紀のアーバンデザイン：車の都市から人の街へ」というテーマで、理系チャレンジ講座の第3回を実施しました。遠隔配信した大分鶴崎、安心院、三重総合、臼杵、大分雄城台、大分西、中津南、別府翔青、日田、国東および来学受講した由布、大分東明の12校176名が受講しました。

まず、建築デザインの基本にある『Less is More』という考え方について、「できる限りシンプルに、必要なものだけで組み立てる、それが美しい建築である」という原則を述べられ、大分県立美術館の例を示されました。しかし、「実際の風景はむしろ逆の原理でできている」ということで、講義の前半



は主に、1980年代から1990年代の車中心社会が生んだ郊外の風景の説明をされました。ロードサイドに多く見られるコンビニや紳士服店、飲食店などの具体例を挙げ、同じ商品を扱う店が同じ色遣いの看板を掲げていること、看板のデザイン性が重視されるようになったこと、看板が大型化したこと、それらの背景には、『看板

の「7秒法則』があることを話されました。また、その結果、郊外には大型チェーン店が軒を連ねることになり、まちなかにあった個人商店は姿を消していくことになったと説明されました。

講義の後半では、鎌倉大町のシェアカフェや沖縄県浦添市の港川外人住宅カフェというまちなかの再生例を詳しく説明された。そして、まちに新たな元気を与えた、辺鄙な場所の古いがおしゃれな空間は、若者の手によって作られ、SNSを媒介として多くの人々に共有されていること、情報が氾濫する時代に、関心のある情報だけを知識として吸収していく若者のメディアとの関わり方によって、まちは大きく変化する可能性にあふれていることを示唆されました。最後に、若者にあわせてまちは作られる。地元には面白いところがあるので、自分のまちの良さを発見してほしいと、話を結ばれました。



授業後に実施したアンケートでは「総合的に判断して授業がよかった」（97%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ）、「教員は真剣に取り組んでいた」（99%）、「受講生は授業に意欲的に取り組んでいた」（96%）という結果でした。遠隔配信については、「音声はよく聞こえた」（90%）、「映像はよく見えた」（96%）という結果が出ました。